

氏名（本籍）	伊藤 文香（東京都）
学位の種類	博士（保健医療科学）
学位記番号	博甲第44号
学位授与年月日	令和4年3月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	保健医療科学研究科
学位論文題目	作業に焦点を当てた教育プログラムに参加した地域在住高齢者における作業の知識やスキルの活用プロセス探索

学位審査委員

主査	茨城県立医療大学教授	博士（医学）	白石 英樹
	茨城県立医療大学教授	博士（医学）	山川 百合子
	茨城県立医療大学教授	博士（学術）	加納 尚美
	岐阜保健大学特任教授	博士（作業療法学）	港 美雪

論文の内容の要旨

【背景】 作業療法士は、作業と健康に関する知識と技術を有しており、生活の中で参加を維持・促進するよう作業の知識やスキルを提供する作業に焦点を当てた教育プログラム（以下、作業EP）を実施し、人々の参加や健康に貢献している。Clark（1997）らが用いた作業EPの手法は、広く国内外で用いられ、健康アウトカムに良い影響を与えることを示している。近年、ヘルスリテラシーを向上させることで、健康を促進する行動変容が起こることが注目されており、作業療法領域では、作業に焦点を当てたリテラシーである「作業リテラシー」が提唱され、地域で作業に強く結びつきながら暮らしていくことは有益であるとされ、研究や実践への応用が始まっている。作業EPの研究では、参加者の作業リテラシーが高められ、行動変容が促されたことが示唆されている。しかし、多くの作業EPが生活の質や健康維持・促進に効果があることは示されているが、何故そのような結果となったかは明らかになっていない。また、どの知識とスキルが、対象者にどのように認識され、生活に活用されているのかも解っていない。作業EPが作業リテラシーをどのように高めるのかの理解を深めるためには、作業の知識を「活用するに至るプロセス」を探索する必要がある。作業リテラシーを高め、より健康を維持・促進する効果的な作業EPを開発するためにも、作業の知識やスキルの活用プロセス探索は急務である。作業リテラシーは、「日常生活における人間の作業に関する知識（情報）を入手し、理解し、解釈し、活用する能力」を意味している。

【目的】 本研究では、作業 EP に参加し作業の知識・スキルを得た地域在住高齢者が、プログラム（作業 EP）後の実生活の中で、どのような作業の知識やスキルをどのようなプロセスで活用するに至ったかという活用プロセスを探索することである。

【方法】 第 1 研究は、本研究で実施された作業 EP において、どのような作業の知識や体験をどのように提供するプログラムであったのか、本作業 EP の目的に適合したプログラムであったのかを検証する実施評価と提供されたプログラムがどのような質であったかを明らかにする結果評価の 2 つを実施し検証した。第 2 研究は、作業 EP に参加後、地域在住高齢者が実生活の中でプログラムによって提供された作業の知識やスキルをどのように活用するのか、質的研究手法を用いその活用プロセスを探索した。本研究は、茨城県立医療大学倫理審査委員会より承認され実施した（茨城県立医療大学倫理審査委員承認第 529）。

【結果及び考察】 第 1 研究では、実施した作業 EP が目的に適合したプログラムであったのかを検討した。その結果、実施前に決めた目的に適合したプログラムであったことが示された。第 2 研究では、本作業 EP で提供されたとどの作業の知識とスキルの体験を、どのように自分の生活で活用していったのかに関するプロセスを探索した。その結果、現在している又は過去にしていた作業に関して 7 つのプロセス（作業の代償、作業中の技能向上、作業の継続維持、作業間の調整、作業の再開、作業の知識教育、作業の見通し）が示され、新しい作業に関しては 2 つのプロセス（作業の開始、作業への応用発見）が見いだされ、合計 9 つの活用プロセスがあることが明らかになった。更に、作業の知識やスキルの体験を活用する背景には、7 つの要因（他者との関係、作業に対する有能感、作業に関する負担感、作業に対する望み、作業に対する動機付け、家庭内での役割、場所の慣れ具合）が関係していることが示唆された。これらの結果より、現在している作業・過去にしていた作業との結びつきを強化し、現在している作業の継続、加齢による心身機能の低下によってできなくなった作業の代わりに行う新たな作業との結びつきを促進することで、生活の質や健康を維持・促進する効果的な作業 EP を開発するための重要な知見が得られたと考える。

【今後の課題】 第 1 研究では、評価が単年度しか実施されていないことや結果評価の信頼性や妥当性が十分検証されていないアンケート調査があり、検証結果においても不十分な点があることは否定できない。そのため、今回の知見はこうした点を考慮して実践に応用する必要がある。第 2 研究では、情報提供者の家族構成が、家族と同居か夫婦 2 人暮らしであった。一方、1 人暮らしの高齢者は増加傾向にあり、1 人暮らしの高齢者における作業の知識や体験の活用プロセスを探索することが急務な課題であると考えられる。

【結語】 本研究では、地域在住高齢者が参加した作業 EP の内容と質の検証を行い、次にそのプログラムの参加者のどの作業の知識と体験がどのように活用されているのか、その活用に至るプロセスを探索することで、作業 EP による作業リテラシーの向上と生活の関係の理解を深める知見を得ることができた。本研究の知見は、作業療法の専門特有の技術を用いた介護予防をはじめとするヘルスプロモーション教育の成果を示すだけでなく、その開発に有用な視点を提供するものである。また、本研究の知見は地域生活を維持するためのよりよいヘルスプロモーション教育に活かすこともでき、作業療法だけでなく、広く保健医療・福祉領域に貢献するものであると考える。

審査の結果の要旨

令和4年2月2日、主査ならびに副査2名、外部審査員1名の合計4名の審査員全員の出席のもと、提出された論文の審査を行った。その内容を以下に記す。

1. 新規性・創造性について

本研究は、人がヘルスプロモーションとしての作業リテラシー（日常生活における人間の作業に関する知識・情報を入手し、理解と解釈を行い、活用する能力）を高めるための理解について、地域在住の高齢者を対象に2つの調査研究を行ったものである。第一研究では、人が日常で行っている活動である作業に焦点を当てた教育プログラム（作業 Education Program: 作業E P）の内容や質を検証する調査研究（実施評価と結果評価）を実施し、第二研究では、その作業E Pがその後において実際にどのように対象者の生活の中で活用されているのかを調査（インタビュー）し、作業E Pの内容が「活用されるに至るプロセス」を検証している。先行研究では、作業の知識やスキルに関する情報を提供することで、人の生活の質や健康に良い影響を及ぼす効果について報告されているが、どのようにその情報が活用されていくのかの活用（に至る）プロセスは明確に報告されたものはない。今回、実施した第一研究での作業E Pの質の評価・検証とともに従来の研究では解明されてこなかった行動変容（活用）に至るプロセスを第二研究では質的研究手法を用いて調査し、先行研究にはない新たな知見を示しており、本研究は新規性があると考えられる。また、作業に焦点を当てた実践としての作業的教育の成果に着目した上で、そのプロセスを作業リテラシーの視点から探究した本研究には、創造性も備えているものと考えられる。

2. 専門性との関連について

本研究は、作業療法領域における重要な概念に関する研究であり、作業的教育、作業リテラシー、そして作業的成果の関連性について質的研究を用いて知識を探究し、作業に焦点を当てた実践の仮説を構築する点において、作業療法学の発展に寄与するものと考えられる。また、「健康を視野に入れた作業リテラシー」を学ぶための教育的戦略の開発へ、そしてその実践の学術的基盤となる作業科学の発展へインパクトを与えるものと思われる。さらに、本研究は作業療法領域に限らず保健や Well-Being など幅広い領域との関連性を有しているものである。本研究の報告は、作業療法領域にとっての重要な知見の報告のみならず、医療・保健領域にまたがる有用な知見を含んでおり、人の健康や生活、生きがいなどに寄与する価値ある情報が含まれているものと考えられる。

3. 論理性について

本論文において、序論では本研究に関する現時点での状況や現時点までの経過、明らか点や明らかとなっていない点などを整理し、本研究の実施に至る必要性や意義について論述されている。その後、第一研究では、第二研究に影響を及ぼす作業E Pの検証（内容の質や対象者への適切性、など）を行い、十分な質的保証が得られた作業E Pへ

参加した対象者へ、次なるステップである第二研究（作業E Pで得られた知識やスキルを活用するに至るプロセスの解明）へ進めて実施し、報告を行っている。本博士論文においては、全体的な論理性は保たれており、また各研究における論述においても論理的に積み上げられており、論文展開は論理性を有して論述されている。一方で、本研究の結論を導く上で、第二研究の結果が、第一研究における実践の学術的根拠と実践内容の影響を受ける点においての考察にやや不十分性が感じられる。また、論理性を支える考察や総合考察がやや簡潔すぎるため、その結論に至る道筋を語るには更なる丁寧な考察を加えていくことが必要と考える。

4. 信頼性・妥当性について

第一研究では、アンケート調査形式による作業E Pの質的保証を検証しており、アンケートもいくつかの内容や種類にて実施し、多角的な面から分析するなど信頼性はある程度確保されているものとする。しかし、アンケート調査の使い方において、本来の趣旨とは若干異なる目的での使用も見られており、その結果が示す意味には慎重な解釈をする必要がある。第二研究では、対象者への半構造化インタビューの情報を基に、活用プロセスの解釈・分析を行っているが、その解釈・分析においても多人数によるチェックや協議（専門家との検討や対象者へのメンバーチェックなど）が行われており、信頼性は担保されているものとする。信憑性と確証性については、サブカテゴリー、カテゴリーが生成されるまでのコードレベルのデータを示すと更によかったと考える。ただ、結果の解釈にやや偏りと捉えられそうな解釈が見られるが、本質的な点に影響を及ぼすほどではなく、この点においては、もう少し広い視点で結果をとらえ、解釈ができると思われたい。対象者においては後期高齢者が多く、また独居生活者がいないなど、対象者の偏りについての課題は今後の調査での取り組みに期待する。

5. 論文の表現力について

全体的に文章表現は適切で、体裁も整っている。研究背景や文献レビューが適切に記述されており、研究方法から結果までの研究のプロセスがわかりやすく表現されている。しかし、第二研究で得られた活用プロセスに関わる「9つのプロセス」は本文から読み取りにくく、図や表を用いてわかりやすく表現するとより理解が得られるものと思われる。また論文の最も大事な部分である考察は記述が少なく、粗い印象やインパクトを損なう可能性もあり、さらなる丁寧で深めた考察の論述をしていただければと考える。また、本研究の結果を従来の研究や仮説との比較し、相違性への言及など、さらに詳しく説明し、本研究の独自性や日本での意義をもう少し考察で強調して表現してもよかったものと思われる。

6. 総合評価

本研究は、第一研究における作業E Pの内容と質を検証し、その検証において問題の無い作業E P（質の確保されている）へ参加した対象者に対し、作業E Pで得た情報・知識やスキルをどのように理解・解釈し、対象者自身の生活の中で活用しているのかを調査し、作業E Pで得た情報・知識やスキルを「活用するに至ったプロセス」を分析する構成となっている。そのため、第一研究と第二研究は相互に重要な研究の意味合いを有しており、これらの研究の実施・遂行の過程においては、協働による分担や確認、

チェックなどが行われながら進められており、丁寧な研究となっている。また、様々な条件や制限の下での実施であったにも関わらず先行研究にはない新規的で発展的な知見を得ることができており、専門領域との関連性でもインパクトのある研究であると考えられる。本研究の成果は、作業療法の視点から超高齢化社会での大きな課題であるヘルスリテラシー向上に大きく貢献するものと考えられる。

本研究において、調査における手順やその結果の解釈など、信頼性の確保はされており、博士論文として十分な内容を有しているものと判断した。また、本博士論文における研究の遂行においては、本学の倫理委員会から承認を得て実施されており、十分な倫理的配慮がなされたなかで行われたものである。

上記の結果、審査委員全員の一致をもって、本論文が博士論文として合格に値するものと判定した。